

水俣病を实態調査

熊本短大
社会学科

慰問をかねて現地へ

世界の奇病といわれる水俣病は、発生いらい八年を経た現在、なお的確な治療法もなく、腫や手足の機能をおかされたまま悲惨な生活を送っている患者が多いが、熊本短期大学社会学科では夏休みを利用してこれら患者の慰問をかねて実態調査を行なうことになり、内田岡大教授、岡本講師はじめ属下女学生20名、男子十人が八日から三日間現地を訪れる。

この調査は被害いらいの患者生活や、母胎からの被害をまげないた小児水俣病の被害の実態を調査する

公害に対する国家的な施策を求め基礎資料にしようというのがねらい。とくに一地方に限られた問題としてとらえれば過小評価されがちなだけに、詳細な資料が必要となるわけで、一行は現地で患者の一人一人に面接し被害以前の生活から被害以後の精神的、経済的負担の推移にまでわたって聞き取り調査を行なう。

また子どもたちには慰問品を用意し、大人形などをも計画して慰めるとして行なう。